

はじめに

人との関わりの中で生物多様性が維持されてきた「里地里山」の重要性はかねてから指摘されており、昨年11月に策定された第3次生物多様性国家戦略でも、わが国の生物多様性の3つの危機の1つとして、「里地里山などにおける人間活動の縮小による影響」が挙げられています。水域についても、国家戦略では、里地里山と同様に人との暮らしと強い繋がりのある地域を里海（さとうみ）と呼び、自然生態系と調和しつつ人手を加えることにより、高い生産性と生物多様性の保全が図られている里海を今後も適切な保全をすることが必要と述べられています。

それに触発されてか、最近、琵琶湖でも「里湖」の重要性が指摘されるようになってきました。しかし、里海や里湖とは具体的にどのような水域で、そこにはどのような生き物が生まれ、人手をどのように加えることで生物多様性が維持されてきたのかについての科学的検討はほとんど行われておらず、「里海」、「里湖」という言葉が科学的根拠のないままに一人歩きしているのが現状です。

この研究会では、人との関わりの中で生物多様性が維持されてきた海域とはどのような地域であるか、また里海についての考え方について、まず海洋生物学の専門家の方からお話をいただきます。

次に、琵琶湖周辺に点在する内湖の生物多様性の現状と人との関わりについて、陸水生物学、歴史地理学の立場から検討するとともに、実際に内湖の保全活動を行っておられるNPOや市の担当者からコメントをいただくことで、里海（さとうみ）としての内湖を今後どのように保全していけばよいかについて、参加者の皆さまとともに考えていきます。